

---

# 運命なんて怖くない！

ヒロユキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命なんて怖くない！

### 【NZコード】

N8545W

### 【作者名】

ヒロユキ

### 【あらすじ】

「ああ、お嬢ちゃん。あんた、おれっちの巫女になってくれよ」  
夏休み、家族旅行で訪れたとある町の神社で、大阪弁の天然少女、  
青山椿は奇妙な神様、ミカヅチと出会う。その神は、神の消えたこの町の新たな守護者となるために、椿の力が必要なのだと言う。困った人を放つておけない椿はミカヅチの願いを聞き入れ、町で偶然再会した幼なじみの少年、小賀玉白路と共に、土地の力を集める儀式を行うため、真夏の町を駆け抜けることになる。しかし、そこには思わぬカラクリがあり……。神に見放された町、神霧瀬町。そこ

で繰り広げられる運命的な物語を少女の純真無垢なる瞳が映しだす。ちょっとハイテンションでミステリアス、ぎゅぎゅぎゅーっとマイペースな神様ファンタジー！

## プロローグ 少女の瞳～Pray～（前書き）

どうも、初めましての方は初めまして。他作品から引き続きお読み頂いている方は、また改めまして、よろしくお願いします。作者のヒロユキというものです。

この度はこのような珍奇な僕の作品にご興味頂きありがとうございます。ご期待に添える作品になるか分かりませんが、精一杯努力しようと思っていますので、どうかよろしくお願ひします。

さて、『存知の方もいらっしゃるかと思いますが、この作品は『天罰なんて怖くない！』の続編に当たる物語です。そのため、前作をお読み頂いていた方が、この作品をより楽しめるのではないか、と思います。

しかし、未読の方でも無理なくお読みいただけるよう、前作との物語上の繋がりはない設定（前作に登場したキャラクターは登場しますが）で執筆していく予定ですので、ご安心下さい。

# プロローグ 少女の瞳 ~Pray~

ああ、神様。

どうか、神様。

うちは祈ります。

膝をついて、部屋の窓から、夜空に向けて、

うちは祈りを捧げます。

遠い遠い、お空の上、

もっと遠い、お星様の上にいる神様へ。

うちのお願い、聞いてください。

うちには、今、好きな人がいます。

とてもとても優しくて、大好きな人です。

毎日でもお話しして、お散歩して、一緒に手をつないでいたい人  
です。

うちがその人ことを想うと、いつもぽあぽあした気持ちにな  
って、ぼーっとして、ほっぺが温かくなつてきます。

それくらいに、好きなのです。

あの、まあまあ、ところの変ですか？

うちが友達にそのことを話すと、なんやそれ、変なのー、と言つて笑われました。

そんなにおかしいことなのでしょうか。

でも、本当にうちはまああしてしまつのです。まあまあは、まああなのです。

と、それはさておき、お願ひです。

実はうちが好きな人は今、別の町にいます。

遠い、遠い、別の町へ引っ越ししてしまつたのです。

先週の土曜日に車に乗つて行つてしましました。

その日は、ざあざあとした冷たい雨が降つてゐる日で、その人はとても悲しい顔をして俯いたまま、「じゃあね、さよなら」とだけ言い残して、行つてしましました。

前にその人が話していた事には、もつれると会えない、とのことでした。

そう言われた時には、とても驚いて、うちは何も言えなくなりました。その時にはまだ気がついていませんでしたが、うちはそのずっと前から、その人のことを好きなのでした。

もしも……もしも、それに気がついていれば、あの時、つかは……。

お願いです、神様。

どうか、うちとその人を会わせてください。

もう一度でもいいのです。どうしても、その人に会いたいのです。

一言、心のそこから、「大好き」と言いたいのです。

どうか、お願いします。

ああ、神様。

突然、暗い部屋の明かりがパッと灯りました。

ベッドの上で跪いていたうちは、驚いて振り返ります。乙女の純粋な祈りの邪魔をするのは何者なのか、その正体を見極めようと思つたわけですが、そこにいたのは、暗い部屋で一人、ぶつぶつと咳く幼い娘の姿を心配している母親の姿でした。

「椿、まだ起きてるん?」

と頭をくしゃくしゃしながら、お母さんは寝ぼけた田で、ふらふらとうちのベッドに歩いてきます。

そして、ぽふん、うちの隣に座ると、窓際にいるうちをひょいと事もなく抱えて、膝の上に、これまた、ぽすん、と乗せました。

「ええ子は早う寝なあかんので」

そう言ひながらひひの頭を優しくなでなでしておきます。

「ち、ちやうじな、おゆふ」

と、つむぎその手をビサながら、言い返します。

「？」

うちな、今 神様にお願いしててん

「かみれま？」

セキカミル

七九

一  
うん

「くり、とうちは頷きました。それはそれは眠ることよりも大切なお願いだつたのです。だつて、それはうちの好きな人への……。

「一せば、あ」

「うかせや」「うかせや」という言葉がついて、顔を上げます。

「なんやの?」

驚いたお母さんが上から覗き込んできました。

「急に元気な声なんかだして」

「なあなあ、お母さんなら、神様の声が聞こえるんやひつん？」

「神様の声？」

「せや、大人になつたらこりんな人と知り合えるんやひ。この前やつて、サンタさんと知り合ってお母さん言つてたし」

「あ、ああ、そんあことも言つたかなー……」

「それやつたら、お母さん。神様とも知り合になんちやうん？ お

話、できくんの？」

すると、それを聞くと、お母さんは田を丸くして、いきなり、ふふふ、と笑い始めました。

「我が娘ながら、ほんまに椿はおもろこ」と聞くなー」

「ねえねえ、聞こえへんの？」

「ふふふ、そうやなー」

口を押されて笑いを堪えながら、

「もちろんわかるで、なんせ、つても椿の母さんは胸を呑きました。

と血信たつぱつにお母さんは胸を呑きました。

「え、ほんまにー？」

「じいわや、椿は神様にどんなことをお願いしたんや？」

そこで、うちは、先ほど神様に祈つたことをそつくりそのままお母さんに教えました。少し恥ずかしかったですが、これも願いを叶

えるためです。ちょっとくらいのことは我慢します。  
つかのその祈りをお母さんは妙に興味深そうにこちらにアクションを取りながら聞いていました。  
そうして聞き終わって……。

「やつかそつか、椿には好きな人がおったんやね」

としみじみと頷きました。

「我が娘もずいぶん成長したもんやなー」

「……成長？」

よく意味が分かりません。

「ともかく、今はその人、引っ越ししてしまったからなー」

「うん、それは大変やな。会えへんいつのまゝ、一番悲しごりとや」

今度は深々と頷いて、それでお母さんはぽかんと口を開けります。

「よつしや、そういうならお母さんで止め取けたで」

「え、ほんまに？」

「可愛い娘の願い事を聞いとこつ放つたらかしこせできへんや。よつ見とれ。母さんが神様と話したる」

そして、いきなりお母さんは田と田の間に指を置いて、難しそうな顔をしたと思うと、

「うーん、ぱぱぱぱぱ」

おまじないをかるよつこやつ言いました。

「うーん、ほうせつ、椿は……そつか、なるほどなー」

「うやうや、神様との通信に成功したよつです。うちは、ずいぶんお手軽なんやなー、となんとなく思いましたが、とにかく、神様のお返事の方が気になります。

「なあなあ、神様はなんて書いたの?」

「うーん、それはな……」

そして、すつとお母さんは息を止めて、優しくうつ声こました。

「大丈夫。問題ないで。いつか必ずその子と椿はまた会える」

「え! ?」

「何しろ、それは神様の『運命』で決まつてることやからな。間違いないで」

「やつた、やつたー!」

嬉しさのあまり、うちは思わず、その場で飛び跳ねました。これはベッドで寝てなんかいられません。今からでもパーティーをしたい気持ちになります。

しかし、あまり調子に乗りすぎたのか、お母さんの足を踏んでしまい、怒られてしましました。何事も、やり過ぎには注意が必要なようです。

それから、じょじょくして。。。

「椿、あんたにひとつあることがある

急にお母さんが言いました。

「何?」

お母さんの膝の上で寝転んで遊んでいたうちは顔を上げました。

「椿、あんたが一番得意やと黙つもんを伸ばしなさい  
え?」

「あんなつだつたの?、うちは画面ばかりこました。

「得意なもん?」

「そりや、なんか一ついへりあるやうやへ。

うつ言われて、うちは少しだけ黙つて、考え込みます。うちの得意なこと、得意なこと、何があるやうか。

「そや、」の前先生こつちお裁縫が上手やつて褒められたんやつた  
「裁縫かー。そやな、椿は手先が器用やしな」

するとお母さんは、うちの小さな手を握つて、ふにふこと揉んで  
きました。じつと見つめながら、また揉みます。くすぐつたくてた  
まつません。

「じやあ、頑張つてお裁縫を上手になつて、次にその下に余つ持つて、  
驚かしてしまい。そうしたらその子も椿の魅力にイチ口ロや

「イチ口ロ?」

それは一体どうこつ意味でしょ?。

「そりや、イチ口ロのイチ口ロ?」うそを

「ふふ、なんやのそれ、」うそつきて、ふふ。イチ口ロうそりんか

ー。それはす「」いやん」

「ちは何だかおかしくなつて笑いました。けりけりとお腹を抱えて笑い転げます。しかし、お母さんはまだ眞面目な顔で「うちを見ていました。そして、急にひのじをあわすと背中から抱きしめる」と、

「椿」

とすぐ耳元で名前を呼んできました。お母さんの息が耳の産毛を触ります。

同時に、お母さんの優しい香りがふわふわと漂ってきます。うちはその香りが大好きで、それを鼻から吸い込むとともに幸せな気持ちになりました。

「何、お母さん」

「椿、あんたはな、誰よりも綺麗な瞳をした子や」「綺麗な目？」

「そりや。誰よりも、物事を素直に、真っ直ぐに受け止めることが出来る力がある。こつもにこにこできるし、皆に優しい。それはな、とても大事なことや。皆が出来る」ととねちゃう

「……」

何だか、妙にお母さんが真剣で、「ちは思わず口を開じてしまいました。

「ふふ、お母さんが保証したるで。あんたはええ子やから、大きくなつたら別嬪べっぴんさんになる。周りの男が放つとかんくらいこ、で、な」

せやから、早う寝ること。美人に夜更かしは大敵やで。

やつ言い残して、お母さんは部屋を出ていってしまった。後  
にま、ベッドに座つたままのつむがぼつんと残されます。

綺麗な瞳……。

じつこつ意味やひ。

それにはつけひことひては謎の言葉でした。

もしかしたら、お母さん。

お母のお星様が、つかの間に映つて見えたんかな。

ふとそんなことを思いました。

ととん、たたん、ととん、たたん 。

移動中の列車のもたらす規則的な揺れの中で、つちは田を覚ました。

薄ぼんやりとした意識の中で、見えない透明な光のアーチをくべつて行つたような、不思議な感覚がしました。ふわりと体が浮いて、別の空間に飛び移つたような気もします。

つちは、どうやら、窓側の席に座つて、肘掛けに寄りかかるような格好で、眠つていたようでした。

車窓からは真夏の光がきらきらと溢れ、ガタガタと揺れるその窓枠の隙間からは、濃厚な夏の青い匂いが滲み出しています。

「う、うそ……」

態勢を元に戻しつつ、大きく伸びをして、深呼吸をしてみました。体の筋肉固まつている辺り、どうやら、ずいぶん長いこと眠つていたようです。

すると、向かって左の席に座つていたお母さんが薄田を開けてうちを見てこむのに気が付きました。

「うそで、ようやく田が覚めたみたいやな」

と、だるそうにあぐびをします。くしゃりと前髪が潰れてこむのを見ると、お母さんも一緒に跳つていていたようでした。

「なんか、夢でも見てたん?」

やう聞くので、つむ頭に手を当てる、つこ先程の記憶を思い出すしてみます。

しかし、生憎ながら、夢とこつもの不安定なよつで、つむせんやむけいとほんとんど思に出す」とほできません。

「ええと、なんか懐かしい夢やつたのは分かるんやけど」

それも、とても、大切な夢やつたよつな……。

「あ、お母さんもおつた氣がする」

やう聞つて、お母さんほんとつり笑いました。

「なるほどな。椿が眠りながら嬉しそうな顔してたんは、お母さんと一緒にやつたからやな」

そして、座席からぐりと前のめりになつたと細つて、手を伸ばしてつむの頭をうつりと撫でてきました。

「もへ、ほんまにかわええ子やな」

昔からお母さんほんとやつて何か事あるん」とこつむの頭を撫でます。癖、と言つてもこつらつです。よほどつむの頭は撫で撫でに適している良い頭なのでしょうか。つむほんとよく分かつません。

でも、それはそれです。

さすがにうちももう大学生、頭を撫でられるのこほんとすがに抵抗があります。いつまでも子供とはりやうのです。

なので、つむは一重にお母さんの撫で撫でを断わりました。

「ええ、もうちゅうとだけ」

とが残念しそうにしているお母さんを無視して、窓の外に視線を移します。

すると、そこにある異変に気が付きました。

「うわー、なんか雨が降りそりやなー」

つい先程までの明るい丘差しまじかくから、がたごとと列車の速度に合わせて流れる空の色は、なんともびんよりとしたものになりました。黒ずんだ水に浸した綿のようつな色で、何とも言えない不安感があります。

そして、それに合わせて、ぞいからか、ゴロゴロと鼓膜を震わす雷の音まで聞こえました。

まるで、急に別世界に入り込んだみたいや……。

「」の顔色。うーん、何か起つそつうな予感やな

不安げにお母さんをそばにしつつと、顎の辺りを指で撫でました。まるで不可解な謎に行き当たった探偵のようです。

「天気が悪そなのは、ちゅうどひが向かってる町の方角みた

いやし……」

「大雨?」

「に、なるかもなー」

「洪水?」

「うん、あらえるなー」

「雷で山火事とか」

「ふふ、そうやつたらどうなーする?」

窓の外に田をやつながら、お母さんは聞きました。うちは少し歎

んで、いつ言います。

「……神様」

「……？」

「そうなつたら、空の神様にお願いするかな」

「神様に？」

ふふ、とお母さんは吹き出しました。

「椿はほんまに昔から神様が好きやな」

「あ、お母さん今馬鹿にした目になつたやろ。あかんで、神様はほんまにおるとや。悪いことしたら天罰が当たるんやで」

「ほお、やら怖いな」

言いながらも、お母さんはどこか他人事です。いつの言葉を面白がつて、いるようにも見えます。

むつとしながらも、うちは続けました。

「ともかく、うちはその神様に雲をどけてもらつよつに頼む。そつすれば、万事解決や。きっと旅行中の天氣は毎日快晴になるで」

ぽんと、自信を持つて胸を叩くと、お母さんは顔をへの字にして、うんざりするような顔になりました。

「毎日快晴かー。やら、ちつと暑そつやな」

「毎日雨でどこも行けへんよりはまだマシやな。せつかくの『旅行』やの『行』」

「うなのです。

「うちらがこの列車に乗つてこる理由。

それは、年に一度の家族旅行中であるためなのです。

これは、うちが幼い頃から続いている家族の行事で、大抵三日か四日くらいの期間で、日本の様々な場所に観光にでかけます。

海のきれいな場所に行ったり、山登りをしたり、動物園に行ったりと、なかなかに盛りだくさんな旅です。

うちはそれが毎年の楽しみで、今年だって、一週間前からひらくに眠れませんでした。

それだけ待ち遠しく思っていた旅行なのですから、運悪く雨でずっとどこにもいけない、という事態は何としても防ぎたいものなのです。

「といふで、お父さんは？」

ふいに氣になつてうちは周囲を見回しました。

眠る前まで、お母さんの隣に座つているはずのお父さんの姿が見えなかつたのです。

一体、どこにこつてしまつたのでしょうか。

すると、お母さんが背後の方を振り向きながら、「喫煙車やないの？」と言つました。

「あれ、タバコでも吸いに行つたん？」

「うん。いじじやゆつくり寝られへんとか言つて、ふりふり怒つてなー」

「……？　どうこいつ」と？

意味がわからずに問いかけると、こひひ、とお母さんは意地悪な笑みを浮かべました。

「実はな、おとんが眠りかけるたんびに、くすぐつたり、冷えたジース缶をひつつけたりして、驚かして遊んでたんや」

「うちはそれだけですぐに」という起きた事態を把握しました。これではお父さんが出て行くのも無理はありません。  
呆れた田でお母さんを睨みます。

「お母さん」

「そ、そんな田で見んといて、椿。ほら、なんちゅうか、ほんの出来心やねん」

「出来心?」

「やうやう、旅行に来たら、なんとなくはしゃぎたくなることってあるやん?」

「……まあ、それは分かるけど」

現にうちも、旅行に行く前は興奮して眠れへんかったわけやし。  
しかし、それでも、少し調子に乗り過ぎな気がします。

お母さんもいい大人なのだから、その辺は限度といつものがあるのを知るべきです。全く、お母さんの「うつ無邪氣な」ところは時に問題を起こすのです。

「とにかく、お父さんに謝りに行!」

「ええ、面倒臭いやん」

「でも、二人が喧嘩してたらせつかくの旅行が台なしね」

そう言つて、うちは立ち上がりつてお母さんの手を引っ張つたときでした。

ピンポン。

伸びやかなベルの音が車内に響きました。うちははつとなつて立ち止まります。

どうやら、アナウンスが入つたようです。急に列車のスピードが落ちてきたのも感じます。

『まもなく、神霧瀬、神霧瀬……』

それが、うちらの目的地の名でした。

列車が駅のホームにゆっくりと停車し、自動ドアが開くと、うちは乗客の誰よりも先に外へ飛び出しました。

「 いじが神霧瀬町！」

かみうせ

そう叫んで、その場でぐるりと一回転をします。

うちの胸は今、はちきれんばかりにドキドキしていました。何しろ、うちが生まれて初めて訪れた町なのです。興奮しないでくれ、という方が無理な相談です。うちの目に映るもの、肌で感じるもの、耳から聞こえるもの、全てが新鮮な気がして、うちの心のセンサーがビンビンに反応しているのが分かりました。『ああんぎゅん』と胸の中のエンジンが回転する音が聞こえます。

しかし、神霧瀬町の駅はうちの楽しい気分とは裏腹に、どこか寂しげな雰囲気が漂っていました。

それも無理はありません。

何しろ、駅の外に広がる空模様が、

「 雨やもんなー」

そうです。

先ほど列車の窓からこちらの町の方角に黒い雨雲が立ち込めているのが見えましたが、どうやらうちらが到着すると同時に降りだしてしまったようなのです。

そのためか、駅にまばらに来ている人たちもその手に傘を持つています。

しかし、うちはそれくらいではめげません。

「お母さん、折りたたみ傘の出番やー。」

と一聲上げると、お母さんが「このまますぐにタクシーで旅館に行くんやで?」といつのも聞かず力バンから傘を取り出していました。

ぱちりと留め金を外して傘を広げ、まだ屋根のある駅のホームにいるところに、うちちは嬉しくなつて、頭の上でぐるぐると回しました。

綺麗に描かれた椿の花の絵が綺麗に咲き誇っています。

「うとううん。やつぱりにひにひにぴつたりのサイズやな」

そう納得して、周囲からおかしな田で見られるのも気にせず、切符を持つて改札口を抜けました。

愛想のいい駅員さんに手を振つて、駅の出口まで来ると、雨の匂いに混じつて、こよいよ夏の青い匂いが肺に充満していくのが分かりました。

うちの胸のドキドキは最高潮に達しています。

そして、うちは向を思つたのか、そこでその気持ちを表現するため、つい、

「やつほーーー!」

と駅の入り口で叫んでしまいました。

いやはや、お恥ずかしい限りです。

うちも、言つた後になつて、その行動のあまりの幼稚さに気が付きました。これではまるで道端ではしゃぐ小学生ではないですか。

いくら嬉しくても、自分の感情を抑えられるだけの制御能力といつのを身につけなければなりません。

「つかはその後、赤面しながら無駄に高揚してしまった気持ちをどうするべきか悩み、しばらく、そう叫んだポーズのままでいましたが、ふいに、誰かの気配に気が付きました。

駅の入り口の右手、障害者用のスロープを降りた先にあるベンチに、誰かが座っているのです。

つかが振り向くと、その人物と目が合いました。

どうやら、少年のようです。

彼は駅の軒下のその古びたベンチに座り、ぽんやりと雨が止むのを待っていたようでした。しかし、そこにあまりにも場違いなことを叫んだうちに驚いて、こちらを見ていたのです。

そう、じつと。

穴が開くほど、じつくつと。

そして、そんな少年をつかも負けじと見つめ返します。

田を、大きく見開いて。

呼吸することさえ、忘れて。

「嘘、だろ……」

しばらくして彼がつぶやいたその言葉は、別にうちが駅のホームで妙なことを叫んだことに対し、呆れているわけではありませんでした。

彼の田はあるで、ありえないものを見ているかのよつてつを凝視して、離れませんでした。しばらくして、彼の震える唇が、ゆつくつと言葉を発します。

「椿、ちゃんなんのか？」

恐る恐る、確かめるよつて……。

「あの、青山、椿ちゃんか？」

そう問われて、うちもやつぱり、と胸の鼓動がさらに高まります。なぜなら、いつも、その少年のことを以前からよく知つてこむことを思い出したのです。

急な濁流に飲み込まれるよつて、一気に過去の記憶が舞い戻ります。頭の中で懐かしい匂いをした引き出しが開き、走馬灯のように、様々な風景が見えました。

「あ、あ、あ……」

知らず、口が開いて、言葉にならない声が漏れ出ていました。そうか、夢やないんや。

つちは小さな頃、仲が良かつたこの人と、離れ離れになつて。気がつけば、手に持っていた傘をつちは地面に落としてしまつていました。雨がさわさわと優しく撫でるよつて、うちの頬を濡らしています。

「シロちゃん……」

「ひは、宝物を抱きしめるよつて、彼を呼びました。

「……今日も、雨降りやね」

彼が、小さく笑つて頷きました。

「ああ、そうだな」

父親の転勤の影響で引越しばかりの生活だった僕には、幼少時、友達と言える存在が一人もいなかつた。

早ければ半年、長くても一年ほどで学校を転校していたのだから、無理もない。大概、新しい学校に連れてこられても、友人を作るほど親しくなる前にそのクラスメイトと別れてしまうか、友達になつても、ろくに付き合いもないうちに送別会になつてしまふのが関の山だつた。

僕がずいぶん成長するまで他人とろくにコミュニケーションを取ることが出来なかつたのも、そのせいだつた。いつだつて人見知りで、他人と会うと一步退いて話をしてしまう癖はなかなか治らなかつた。

僕はただただ、他人と付き合つことが怖かつたのだ。

なぜなら、他人と付き合つていっても、どうせすぐには別れなくてはならないから。それを幼いながらに僕は本能的に悟つていて、いつしか、僕の体は他人に近づくことを無意識に拒否するようになつていた。

必要以上に他人に近づくな。親しくなるな。頼つたり、頼られたりするな。

そう語りかけてくる心の声を僕は眼を閉じていつも感じていた。もしも、他人と関わり過ぎてしまふと、別れる時が辛いから。辛くて、辛くて、悲しいから。

けれど、物事にはいつだつて例外がある。とある小学校で出会つた、あの無邪気な瞳をした少女だけは、違つた。

まるで僕は重力で引き寄せられるように、気がつけば、自然に彼女に近づいていたのだ。天真爛漫で、天使のような笑みを見せる、あの少女に。

僕は彼女と出会った日のことを今でも鮮明に覚えている。

あれは、雨がじとじと降る七月のことだった。

あの日、僕はまたしても父の転勤によつて新たに訪れた町の学校に初めて顔を出すことになつていた。

母親に連れられ、見慣れない校門をくぐつた時の、あの憂鬱な気持ちを今でも僕は憶えている。

またしても、無意味で退屈な新生活が始まると思つて、うきうきした気分だったのだ。

案の定、朝のホームルームで先生に紹介され、教室のドアをくぐつた時の、あの刺さるような興味の視線は、僕をいきなり萎えさせた。

整列した机の上で、新たな出会いに期待する輝く瞳たち。

期待するな、と僕は思つ。

僕に期待なんてするなよ！

僕も、お前たちに期待なんてしないんだから……。

最初に教師が僕の話をして、その後、僕に自己紹介を促した。それはこれまで通つてきたいくつもの学校と同じ流れだった。

僕はため息を吐き出すよつて、はいと小さく返事をし、以前から幾度となく使つてきた感情のこもらない無味乾燥とした言葉でクラスマイトに挨拶をした。

まばらな拍手が起つた気がする。正直、僕にとってはそんなことどうでもよかつた。

ちらりと周囲に目を向けると、何人かの生徒はこれからこの集団の新たな一員となる僕にかなり興味を示しているようだつた。しかし、僕がまるで不貞腐れたかのような顔で自分の席に座ると、彼らは困惑したように顔を見合わせているのが分かつた。

その当時の僕は、転校した場所ではそうしていることが一番利口だと思っていた。見ず知らずの転校生というだけで周囲の人間には話しづらいう空氣があるので、その転校生があからさまに不機嫌そうな顔をしていれば、尚更近寄り難いものだ。

そうすることで、友達になる最初のきっかけの芽を潰そうとしていたのである。

「何だ、あいつ」

「ちょっと怖いよね」

僕なんて、それくらいに思われているのがちょうどいいのだ。そう思わせておけば、自然とクラスメイトたちが自分と関わろうとする気も失せて、勝手に距離を取ってくれるようになるのである。案の定、そのクラスでも僕の自論見通り、僕の自己紹介が終わつた後、僕に話しかけてくるクラスメイトはいなかつた。

そうだ、それでいい。机に顔を伏せながら、そう僕は思つていた。友達なんて作らなくたつて学校生活はやつていいける。クラスで目立たないよう適度に学び、忘れ物をしないよう注意し、揉め事を起こさない。これくらいの要点を守つておけば、学校の時間など勝手に過ぎ去ってくれていくのである。

もしも、何かの『事故』で迂闊に友達なんて作つてしまえば、それは悲劇だ。

僕は今までの人生の中で何度もその悲劇に遭遇してきた。仲が良い友だちと別れることがあれほどに切なく苦しいものだという事を

否が応にも知つていた。

あんなに毎日楽しく遊んでいたのに、あんなに大事な仲間だったのに、その繋がりがいきなり断ち切られて、僕だけ無理やり別の場所に連れていかれてしまうのだ。

僕はよく仲が良かつた昔の友達のことを思い出す。もしも、また会いに行けば、果たして彼らはまた以前と同じように僕と遊んでくれるのだろうか、と思つて切なくなる。

そして、同時に、彼らも会えなくなつた僕のことを思つてくれることはあるのだろうか、と思つ。まだ、この僕を覚えてくれているだろうか。

いや、もしかして、今頃自分のことなど全て忘れて暮らしているのではないか。

そう思ふと、怖くなる。眠れなくなる。

いつかかけがえのない自分がいるはずだった、仲間たちのスペースがいつの間にか消えてなくなり、自分だけが幽霊のような「靈」のような存在になつてしまつことが怖かつた。存在が消えていくようで、とてつもなく怖かつた。

だから、だから、もう一  
最初から友達なんて作らない。

僕はそう心に強く刻み、強く誓つていたのだ。

そして、この敵意が、と僕は思つ。

この身から出す、この敵意これが、僕自身の心を向よりも守るのだ。

チャイムが鳴り、ホームルームが終わつた。児童たちがぱらぱらと席を立ち、雑談を始める。僕はそんな彼らを無視して、一時間目の授業の準備をしようとした時だつた。

いきなり、ガラリと教室のドアが開いたのだ。

「おっはよーーー」<sup>ヒヤヒヤ</sup>いまーす！…

まるで校庭中に響き渡らせるような挨拶だった。

さすがの僕も驚いて、挨拶をしたその人物に目を向けた。教室のドアには小柄な少女が立っていた。目玉がくりくりとした可愛らしい女の子で、ふわふわとした桃色のフリルのついた服を着ている。

もしかして、遅刻したのだろうか、と僕は思つたが、彼女が悪びれず、あまりにも堂々とした様子で教室に入ってきたのを見て、一瞬混乱してしまった。

何なんだ、こいつ。

それを見ていた教師も一瞬固まっていたようだが、すぐに教室の時計に目をやつて、立ち上がると、彼女の方へ歩き出した。おそらく、遅刻してきた彼女を叱るうとしたのだろう。

しかし、その少女は何食わぬ顔で教師の脇をすり抜けると、瞳をきらきらさせながら、なんと、僕の方へ向かってきた。

しばし、我を忘れていた僕だったが、それを見てすぐに気を取り直し、机に突つ伏す。彼女に容易に会話のチャンスを貰てはいけない。

どんな場合でも親しくなるきっかけを貰えるわけにはいかないのだ。

「ああ、転校生の子や！」

はしゃいだ声が耳元で聞こえた。

しかし、僕は無視をする。

「ねえねえ、うち、青山椿いうねん」

ああ、無視無視。

「これから同じクラスメイトやな。仲良つけない聞こえない聞こえない。

「今日は雨降りやね、傘、持つてきた?」

「何うり答える必要はないな。

僕は心に念じる。

僕はただそうしているだけでいいのだ。そつしていれば、どうせこいつも僕の反応がないことに飽きてそのまま自分の席に戻るだろう。

しかし、彼女の気配はなかなかいなくならない。いつたい何をしているのだろうか。

じつとしていると、ふいに、

「ハ、ハ……たま?」

その少女が自分の耳元の傍で何かを言つてゐるのが分かつた。

「うーん、わからへん。これ、何て読むの?」

ああ、なるほど。

僕は顔を伏せつつ、彼女が何をしているのかを理解する。じつやら彼女は教師が僕の机に貼り付けられた僕の名札を読もうとしているようだ。「小賀<sup>おがた</sup>玉白路<sup>たまはくじ</sup>」と教師らしい綺麗な文字で書いてある。おそらく、僕がすぐにクラスメイトに名前を覚えてもらえるようにそうしたのだろうが、それならばせめてフリガナくらじふつてやれ

ばいいのに。

「まあええわ。苗字は後からのお楽しみにしつく」

お楽しみつて。陽気そつに言いやがつて。

しかし、この気持ちは何たゞ、無性に突き込みたくなるな。

すると急にバシバシと肩を叩かれる。

いい加減、うつとおしいな。僕は心中で舌打ちする。

—  
—  
—  
—  
—

そこか  
転校生のお名前にして言ひやんやな

それは白ね白でも『はく』つて、読むんだよ。思わず、そう言ことになるのを僕は堪える。

馴れ馴れしく肩を叩くな。それに、僕の名前は、はぐじ、だ。しろじゃない。

「あれ、シロちゃん？ どうしたん、気分でも悪いん？」

- 1 -

「ち、ち、ち……」  
「なあ、先生呼んで来る？」

「え？ 血が出てんの？ それは大変やん！」

「違う！..」

思わず、僕は席から立ち上がりそう叫んでいた。思い切り叩いた机がガタガタと揺れる。

「僕の名前は白路だ！」

「え？」

「そこの、青山とか言つたか、このやうひ。僕の名前を間違えるんじゃないよ。僕の名前は、小賀玉白路だ！..」

ビイン、と教室に音が響くのが分かる。クラスメイトたちが全員、絶句しているのを感じた。まずい、田立ってしまった。

おずおずと田の前の少女に眼をやる。

これだけ大きな声で怒鳴つてやつたのだ。さぞかし、恐怖にひきつた表情をしているかと思ひきや、彼女はなんと

「いやかに、まるで、天使のよひ、微笑んでいた。

「そつかー、白路君か」

「え？」

そして、彼女は中途半端に浮いてしまつた僕の片手をぎゅっと掴む。どうやら、僕は握手をしているらしい。

「えへへ、これからよろしくなー」

しまつた、『きっかけ』を『えてしまつた。』  
そう思つたときには、もう遅かつた。

駅のベンチで僕達が雨宿りをしているつひー、雨は小降りになり、対して時間もかからないうちに上がってしまったようだつた。

僅かばかりの太陽の光が雲間から溢れ、濡れた町を照らし出している。辺りに漂っていた雨の匂いが風によって流されていった。

しかし、その風は、僕の高鳴った胸の鼓動を静めてはくれなかつた。どくん、どくん、とそれは何かを急いでいるように拍動している。

砂に埋れて風化しかけた時計が、忘れられていた時を取り戻すかのように猛烈なスピードで針を回転させているのだ、と直感的に僕は思った。

なんだか、軽く眩がしそうだ。

そう察知して、少しでも気を落ち着けるためにふっと息を吐くと、隣の彼女を見た。

「それで？　いいのかよ、僕と一緒になんかいて」

何だか、直視していられなくて、言いながら、僕の視線は再び彼女を離れ、遠くの空を見た。仲間とはぐれて孤立したような、ぽつんとした雨雲が漂っている。

「親はもう旅館に行つたんだろう？」

すると、椿は、へへ、と笑つて片手を振つたようだつた。

「かまへん、かまへん。せつかく久しぶりに会つたんやから、お母さんが一緒に遊びなさいー、って言つたくらこやし」

そうして、彼女は上機嫌そうに鼻歌を歌い出した。ちらりと横目を向けると、ベンチの上で子供っぽく足をぶらつかせている。

そんな彼女を見て、僕は椿が昔と変わっていないことを確認した。以前から、彼女はこんな風だった。僕というときはいつだって、楽しそうで、笑顔で、不機嫌になることなんてない。まるで年中彼女の周りだけが春の陽気にでも包まれているかのように見えたものだ。

可愛くて、優しくて、まるで、羽が生えている天使のよう。

そうだ。

彼女は、確かに存在していたんだな。

僕は確信する。

決して、決して、寂しかったあの当時の僕が創りだした妄想なんかじやなかつたんだ。そう思うと、ほつと安堵すると共に、この上なく嬉しくなつた。

しかし、それと同時に、足元がグズグズと溶け出すような疑念が顔を出す。

果たして、本当にこれは現実なのだろうか、自分が見ている夢か何かではないだろうか。

その可能性は十分にあつた。

この広い世界中で、僕がこんなにも偶然、彼女と運命的に再会することなどありえない気がする。何だか、嘘みたいだ。

もしも、本当に夢なのだとしたら、どうすればそれを確認出来るだろう。頬を指で抓る、とか。ベタだが、やってみる価値はあるだろうか。

そんなことを悩んでいると、いきなり、ふにつけ頬に何かが触れた。はつとして振り向くと、椿が不思議そうな顔で僕の頬を指でついていたのだった。

「うわっ！」

僕は思わずのけぞつた。

「驚いた？」

「な、何を？」

「だつて、シロちゃん、うちが話しかけても全然返事してくれへんやん。なんか難しそうな顔してぼうっとしてゐし」

せやから、ちょっといたずらしてみたんや。彼女はさう言つて、ふふふ、と笑う。

僕はそんな彼女を見ながら、同時に、彼女の指が触れた頬に手を当てていた。

今、確かに、触った、よな。彼女の柔らかい指先が。

その感触が僕にこれが夢ではなく現実であることを知づいていた。

「シロ、ちゃん。どうしたん、もしかして怒った？」

「いや、そういうんじゃねえよ。ただ、信じられなくて」

「……？」

「ああ、ええと、何でもない。ちょっとほーっとしてたんだ。気にしないで」

「うう」まかした僕を彼女はしばらく不思議そうに見ていたが、急に何かを思つてついたように指を鳴らした。

「ああ、せやー。」

「な、何だよ」

「折角、こうして偶然会えたんやから、携帯のアドレス交換しよー」

「アドレス交換？」

「うん。それがあつたら、これからも連絡取れるやう」

そして、僕の返事も聞く」とすらせずに、出して出して、と彼女は僕の携帯をせがむ。言いながら、ぐいぐいと隣から彼女が寄つてくるので、僕は動搖しながらも、ポケットから携帯を出して手渡した。

「「これでいいのか?」

「ほお、この黒い携帯、かつこええな」

すると、物珍しそうに、椿はそれを手の上でじろじろと観察した。

「でも、シロちゃんの、黒い携帯かー。ちょっと変やなー」「余計なお世話だし、それに俺はシロちゃんじやねえって」

しかし、僕がそう指摘したのも聞こえていないのか、彼女は早速、携帯の液晶画面を睨みつつ、ボタンをいじくり始めていた。真剣な表情で一つ一つを確認しながら作業をしている。

そんな無防備な彼女の横顔を見ていると、またドキドキしてきたので、僕は無理やり反対の方向を向いた。空っぽになつたポケットに手を入れ、もやもやした気持ちに蓋をする。

「なあ、シロちゃん」

しばらくして、携帯電話のピッシュ音が止んだと同時に、急いで彼女が話しかけてきた。相変わらずののびのびとした口調だ。ビリビリ、アドレスの登録は終わつたらしく。

「もういえば、何でシロちゃんはこの町におるんや?..」

「あれ?..」

僕は思わず間の抜けた声を出して、頭を搔いた。あまりにも唐突に聞かれて拍子抜けしてしまつたのだ。

「説明、してなかつたつけ?..」

「してへんよ。シロちゃんわざわざばかりカーフとじばっかやし

ほんまに、もひ、と彼女は頬を膨らませる。

「せつかく再会したのに、うちのことはいふうでもええん?..」

「まさか、そんなわけないって」

僕は慌てて首を振る。

「椿ちゃんの」と今までずっと忘れたことなんて……

「え、ずっと?..」

瞬間、彼女の額に怪訝そうに眉が寄る。僕はしまつたと口を押された。思わず余計なことを口走つてしまつた。

「うわ、何でもない何でもない。とにかく、俺の話だつたよな」と、彼女は明らかに納得していなかつたようだが、一先ず、頷いてくれた。

「あ……うん」

僕はほつと安堵する。

危ないとこころだつた。まさか、会えなくなつてから、ずっと彼女の事を想い続けてたなんてこと、言えるわけがないよな。

「実は僕、今はこの町に住んでるんだよ。以前までは父さんが転勤の多い仕事してたけど、なんだかんだで辞めちまつて、今ではこの町で別の仕事をしてる。そのお陰で転勤もなくなつたし、ようやく腰を落ち着けて定住できるようになったつてわけ。まあ、そうは言つても、まだ一年くらいだから、ここ的生活に慣れてきたぐらいだけだな」

「じゃあ、これからはずつとこの神霧瀬町にあるん?」

僕は軽く頷いて答える。

「そうなるだろうな。中々いい町だよ、ここは。都会みたいにゴミゴミじてないし、静かで、住んでる人も穏やかだ。転勤ばっかりの時には、こいつ風にゅつたりした気分になれなかつたけど、今は充実してゐる。まあ、ちょっと田舎で多少不便なところはあるけれど……ああ、そういえば、家から大学が近いのは便利だな」

「へえ、それはええなあ。うちは大学が遠いからいつも寝坊せんかドキドキしてんじ

彼女があんまりにも羨ましそうに言うので、僕は少し笑った。確かに、彼女はよく寝坊をしていた記憶がある。初めて会ったときも、寝坊してたんだっけ。

「でも、シロちゃん」

すると、不安気に彼女は眉を寄せた。

「うん？」

「それじゃあ、一年前までは、ずっと引越しばかりやったん？」

「ああ、うん。そうだな」

「それは、大変やつたなあ。いつも引越ししたことあるけど、荷物運ぶんは、えらいしんどいで」

彼女がそう言うので、僕はちらりと彼女の華奢な二の腕を見る。なるほどな。彼女のそれは何かで支えていないと、今にも折れそうなほど頼りない。

そのことを口にしようとした時、彼女がふと、こう言った。

「でもな、新しい町に行くのは楽しいな」

「え？」

「だつて、何もかもが見たことのない場所なんやで。なんだか知らない場所に冒険しに行くみたいやん」

彼女のその無邪気な笑みに、僕は呆気に取られた気がした。あまりにも自分の感覚とかけ離れた言葉に、つい、気が抜けてしまったのだ。

引越しは、楽しい、か。

いかにも彼女らしい考えだな。

僕は心のなかで、そつと苦笑いをする。

自分には、それは苦痛でしかなかつたけれど。  
どこに行こうとも僕は同じ空虚な気持ちのままで、新しい家も、  
町並みも、学校も、人々も、興味なんてなく全部どうでも良かつた。  
どうせ、またすぐ見れなくなつてしまつものばかりだ。僕の記憶には  
思い出がない。同時に未来もない。

僕が楽しいと思つたのは、ただ一つだけ。

椿ちゃんの隣にいる時だけだつた。

そう、彼女の傍にいるだけで、僕は何もかもが輝いて見えたのだ。  
好きでもない町のビル群も、通りを行き過ぎる人々も、野辺にひつ  
そりと咲く可愛らしい花々たちも。

彼女といた頃より良かつた場所なんて、どこにもなかつた。  
そうどこにも……。

「な、なあ椿ちゃん」

僕は、ふいに思いついて、問いかけた。どうしても、『それ』を  
確かめずにはいられなかつた。

「うん?」

「僕と離れ離れになつて、さ。その、どうだつた?」

「どうだつたつて?」

「なにか、感じなかつた?」

「何かつて?」

彼女は目を瞬かせて、ぽかんとしている。質問の意図が分からな

いのだれい。

「こや、だかひた、あの……」「……

そりに言いかけた時。

プルルル 。

急な着信音に僕と椿はぎょっとして振り向いた。見ると、椿が持つていてる僕の携帯電話が震えている。

「シロちゃん、電話みたいで」

「ああ、うそ」

僕はそのタイミングの悪い着信を少々恨みながらも、彼女から携帯を受け取ると、サブディスプレイで誰からの電話なのかを確認した。

『珊瑚先輩』

それは大学の同じ学部の先輩の名前である。一体何の用なのだろう。

う。

「はい、もしもし」

と僕は携帯を耳に当てる。すると、快活な先輩の声がいきなり聞こえてきた。

「おお、たまちやーん。やつほー、元気してるー？」  
「ああ、はい、元気ですよ。先輩は如何ですか？」

「私？ ああ、私もバリバリ元気だぜ。やつぱり若者は「ついでなくつちゃいけないよねー」

「やつですね。バリバリ元気なのが若者ですよねー」

僕は適当に先輩に合わせる。これはいつものノリなので、特に意味はない。先輩との軽い挨拶のようなものだ。しかし、ノリが悪いと背中をバシバシ容赦なく叩かれるので、軽い強制もある。まあ、今は通話中なので先輩から何らかの攻撃を受けるということはないのだけれど。

「そいでよお、今うちら大学のゼミ室にいるわけー、する」となくて暇してみるとこなんだわ」

先輩の声の向こうで、がやがやと騒がしい音が聞こえる。大方、ゼミ室で大音量の音楽でも流しているのだろう。いつもひみたくするなど教授に注意されるところのこ。

「は、はあ……」

「「ひちにマツチヨもいるからよお、これから皆でお茶でもしない？ ほら、うち、この前東京まで旅行したって言つたつしょ？ その土産も無駄にたくさんあるんだわ、これが。賞味期限切れちまうのも勿体無いからさー、消費しに来てよ。マジお願いだからさー」「ええと、今から、ですか？」

「あつたりまえじゃん。あれ、なにそれ、たまちやん。これから用事でもあるわけ？ バイトとか？」

「あの、そういうわけじゃないんですけど……」

僕はちらりと隣の椿を見る。彼女は意味が分からぬ感じで首をかしげた。

「ちょっと、野暮用が……」

「あらまあ、怪しーんだ。たまちやん、もしかして、これからデートとか?」

先輩の口から出た想定外の言葉に、僕は不覚にも激しく動搖してしまった。

「で、で、でででで、デートなわけがないですよー、絶対無いですー!」

緊張のあまり、呪律が回っていない。すると、その異変を先輩は鋭くキャッチする。

「おおっと、ちょっと過剰な反応だねー。珊瑚先輩の心理学、人間は嘘をつくとき、その事柄を必要以上に強調する傾向がある。たまちやん、さては図星だな」

「いやいや、本当に違いますから。デートなんて僕に彼女がないことは先輩知ってるでしょ?」

「さあて、どうだか?」

意地悪そうな先輩の声。電話の向こうでにやにやと笑っているのが眼に見えるようだつた。

するとそこで、急に慌ただしい音が聞こえたと思うと、別の人との声がした。

「おい、白路ーーい、い、今のは本当なのか?」

暑苦しい男の声である。

「いの俺に内緒で抜け駆けなのか? ええ? 僕達は彼女いない組。

「どんなときだっていつも一緒に、運命共同体だって誓い合ったのを忘れたのか！」

僕にはすぐに其の人物が誰なのか分かった。僕と同じ心理学部の学生、松樹祐介。通称、マツチョである。その名の通り、肩幅の広い、がつちりとした体つきをしていることと、苗字の松まつとを掛けてそう呼ばれている。

「つむせー。何が運命共同体だ。それはお前が勝手に決めたことだろ？僕はそんなことを承諾した覚えはないぞ」

しかし、携帯の向こうで、祐介は僕の話を聞いている様子はない。

「へやー、今日はやけ食いだー！」

と勝手に悔しがっている声が聞こえる。

「いいか、白路。お前は勝手にそつちでいぢやいぢやきせつをするといいさ。俺は珊瑚先輩と二人で楽しむんだからなー。絶対ゼミ室にはくるんじやねえぞ。珊瑚先輩だけは何があつても渡さねえー。何を勝手に勘違いしてんだ。俺に彼女はいねえって」

「つむせえ、女たらしの話なんて誰が信じるかつーの」

と吐き捨てた後で、急に祐介の声が遠のく。ビリしたのかと思つが、珊瑚先輩と話をしているよつだ。

「先輩、もつあんな女たらしは放つておいて、俺たちだけで楽しみましょ？ほら、まだ開けてないチョコチップクッキーがあります。おこしそうですよ……え、クッキーはもう飽きた？じゃ、じゃあ、このポッキーで、やります？ほら、あのゲームですよ。

両端を、お互いが口にくわえて 「

ゴン。

鈍い音が聞こえたと思ったたら、そこで、通話は切れていた。訳がわからない。

全く、なんだつたのだ、この電話は。僕は嵐が過ぎ去った後のような呆然とした気持ちになつていた。ともかく、あの様子なら、大学の方へは行かなくてもよさそうだ。ふう、と一安心。

携帯を仕舞つて椿の方を見ると、彼女と田が合ひつ。ビリヤリ、会話中、ずっとこちらを見つめていたようだつた。

「どうした？」

「ええと、今の電話の相手つて、女人人？」

「ああ。僕の大学の先輩で、珊瑚先輩つていうんだ」

それが、どうかしたのか？

そう聞くと、彼女は首を横に振つた。

「いや、別に何でもないんやけど……」

と言いつつ、彼女は何かを言いたげだつたが、その何かを本人も理解出来ていないので、困つたように田をキヨロキヨロさせている。

「一体、どうしたのだろう。

まあ、いいか。

「ああ、それにしても、騒がしい先輩たちと話してたら、喉がからからなことを思い出したよ。椿ちゃん、ジュースでも飲む？」

「あ、せやつたらうちが買つてみよ」

と、彼女は元気よく立ち上がる。

「何がええ？」

「椿ちゃんが買つてくれるの？」

「うん。うちもちょうど飲みたかったし。ついでやから」

僕はじやあ、お菓葉に甘えてとコーラを注文して彼女に小銭を一人分渡した。彼女は自分の分は自分で払うと言つたが、僕は買ってきてもううのだから、とそのまま渡した。

「ほんまにええのに」

「いいよ。久しぶりに会つたんだし。これくらい。ああ、それから、自販機ならその辺にあると思うから」

僕は駅の向かい側の通りを指さす。彼女は頷くと「お金、おおきに」と、その方向に駆けて行つた。

そうして、十分ほど経つた頃だろうか。

僕はその間、彼女のとの思い出を少しずつ自分で掘り起こす作業に没頭していたわけであるが、ふと、彼女がすいぶん帰つてこないことに気がついた。

まさか、まだ自販機を探しているのだろうか。僕は考える。しかし、いくら自販機の場所を知らないといつても、この町中にいれば一つは見つかるはずだ。いくらなんでも遅すぎる。僕はだんだん不安になつた。

もしかすると、実は彼女なんてやつぱり存在しなかつたのではな

いか、という疑念がふいに湧き出た。そもそも、こんな場所でこんなにも偶然に再会するなんてこと事態が怪しいのだ。僕は最初から白昼夢でも見ていたのかもしれない。ぶるぶると頭を揺すつて、そこではつと思い出し、僕は携帯電話を見る。

いや、大丈夫だ。実在している。

そこには、彼女の電話番号がきちんと登録されていた。

では、なぜ、彼女は帰つてこないのだろう。

まさか、どこかで交通事故にあつたとか。可能性はゼロではない。しかし、僕は思い直す。もし、この近所で事故があつたなら、間違いなく騒ぎになるはずで、そうなれば僕が気がつかないはずがない。町は至つて静かなままである。救急車のサイレンも聞こえない。じゃあ、どうしたというのだろう。

その時、僕は重要な事を思い出した。彼女には、ある致命的とも言える、残念な性質があることを。そうだ。

「あいつ、方向音痴だつた！」

雨が上がったばかりの街並みは、どこか洗いたての食器のようなさつぱりとした清々しい空氣に満ちていました。

遠くの方から、様子を窺うよつに遠慮がちな蝉の声が聞こえています。水を吸つた大地は、ほどよく湿つてぬかるみ、家々の影は雲の隙間から顔を出した太陽によつて、その色を次第に濃くしてしました。

そんな雨後の街並みの中に、うちは立っていました。

おそらく、もうしばらくすれば、この通りも人の流れができ、活気が生まれることでしょう。いつも通りの、普段通りの、人々の声が行き交う、道になるでしょう。

しかし。

しかし、うちの目には、その人々の流れを妨げかねない巨大な物体が映つていました。あまりの驚きに、片手に持つた小銭を取り落としてしまった氣分です。

うちは、その道路の真ん中にどつしりと突き刺さつたものを見上げて、

「でつかいなー」

と呟きます。

うちの目の前にあるのは、巨大な鉄板で作られた看板でした。

一体、誰がどうやって運んできたのか分かりませんが、軽くビルの二階分はあらうかといふほど大きな看板です。

それが、どういうわけか、うちの前で両手を広げて通せんぼをするように、がつちりと地面に突き立つてゐるのです。まるで、道を歩いてこらうとしたうちにつかり巨人たちの住む国に迷いこんでしまった

よつな心地でした。

「うちは生まれてこの方、こんな珍しい格好の看板を見たことがありません。誰が何をどう思って、こんな巨大な看板を作ったんだと考えたのでしょうか。

事情を知っている方にきちんとした説明をして欲しいのです。  
そこでうちちは少し頭を回転させます。

まあ、これだけ大きいということは、多くの人に見てもらいたい、ということなのでしょう。しかし、それは分かりますが、これは少々大きすぎる気もします。

もしも、通りを曲がってきて、いきなりこんな看板が目の前にあつた人にしてみれば、仰天してひっくり返つても仕方がないほどの巨大さなのです。危うく、うちがそうなるところでした。出来るならば、もっと見る人に優しい看板を立てて欲しいものです。

さて、それはさておき、もう一つ気になったのは、その看板に書いてある文章です。

『冷たい飲み物、自動販売機、こちらにござります』

うちはそれを声に出して確認しつつ読みました。うん、間違いないありません。上から読んでも下から読んでも、そう書いてあります。そして、文章の最後に、隣の道を指し示す矢印が入っているところを見るに、この看板は自販機の場所を案内するためのものようです。

どうやら、この看板を立てた人はよっぽど自分が置いた自販機を使つてもらいいたかったのでしょうか。もしかすると、この地域にしか売つていない、珍しい飲み物を販売しているとも考えられます。この看板はその宣伝用なのです。

うちはそこで、駅のベンチで待つているシロちゃんのことを思い出しました。うちは彼の分の飲み物も買ってくることを引き受けています。珍しくておいしい飲み物を買ってくれば、きっと彼は手を

叩いて喜ぶでしょ。う。

うん、絶対に間違いない。

そう思つたうちば、なんの迷いも躊躇いもなく、その看板が示す方向へと、足を進めていました。

軽く、スキップをしながら。

気持ちよく、鼻歌を歌いながら。

シロちゃんが喜ぶ顔を、思い浮かべながら。

うちは、そんな軽い気持ちで、その道を選んでしまっていたのです。

しかし、もしもある時。

うちがその看板に対して、もう少し疑問に思つていれば、警戒心を持つていれば、あんなことにはならなかつたかもしません。

もしも、危険を感じて、大人しく、引き返していれば。

その後に起きる、とんでもない大事件とは関わり合いもなく、旅行を終えていたに違いありません。

けれども、そんなことを今更言つても後の祭り。

うちは結局、その運命の渦に、この時点で飲み込まれていたのです。

そう、暗く、深い、運命の渦に。

『冷たい飲み物、自動販売機、もうすぐじゃこまか』

うちは、『』のように折れ曲がった木の影に隠れるようにして立たれた看板の矢印が向いた方向へと視線を向けてます。

「もうすぐ、やな」

と確認するように呟いて、足を踏み出しました。  
もう、どれくらい歩いたでしょうか。

うちは、今、街中から離れた森の中を歩いていました。  
そう、深い、森の中です。

ちょっと待て、自販機を探してビービーして森の中にもぐり込むことがあるのか、とう突っ込みは今は無しです。

なぜなら、うちはあの看板さんの言つとおりに、道を進んできただけだからです。

「おかしいな。もうかなり前からもうすぐ、って書いてあるんやけど」

うちは首をひねりながらも、道に倒れた木を踏み越えます。辺りには、いつの間にか、鬱蒼とした木々が生い茂り、まるで誰かが霧吹きで吹きつけたような濃い霧が漂っています。何とも言えない不気味な感じです。

しっかりと手に握っていた小銭も今や汗で濡れています。ああもう、早くしてくれへんと小銭を落としてしまいかもしれません。繁みをかき分けて進むと、そこにまた看板があります。木と木の間、その根っこに埋もれるようにして看板が見えました。ああ、こ

れは説明していませんでしたが、この看板を立てた人も途中からは疲れてしまつたのか、最初の頃のような巨大な物はなくなり、どんどんそのスケールが縮んでいました。今ではこんな風に、うちの膝の下ほどの大ささはありません。

しかし、そこには相変わらずしつかりと、

『 もうすぐもうすぐ、自販機はこちらです。ファイト。』

そう書かれています。

うちは軽くため息を尽きます。もうおいしい飲み物など、半分どうでもよくなつてきました。とりあえず、冷えたお水が一杯もらえばそれでいい気もします。

しかし、それでも今更やつぱり止めたと引き返すことは出来ません。

シロちゃんは今頃何をしているでしょう。さすがにうちの帰りが遅くて心配しているでしょうか。

ああ、申し訳ありません。ごめんな、シロちゃん、早くジュース買つてくるから。

そして、しばらく、田の前に現れた石の階段を上つた時でした。急に視界が開け、目の前に、何やら建物らしきものが見えました。

「あ、もしかしたら、お店やるか？」

こんな人気のない森の奥に変だな、と思いながらもうちはその期待で駆け寄つてみました。

しかし、近づくにつれ、それがおいしい飲み物を売つていてのお店ではないことが分かります。

そこは、ただの、古びた、神社の跡でした。

「うわー」

霧の中からうつすらとその姿を表した神社はボロボロで、屋根は崩れかけ、壁は薦が這い、床は抜けて、そこから草が生い茂るという散々な様相を呈していました。

どうやら、ずいぶん長い間放置されていたようでした。おそらく管理する人がいないのでしょう。うちが少し触つただけで、階段の板がぽろりと剥がれ落ちてしまいました。たぶん、もう木の部分が腐つて朽ちているのでしょう。

「なんか、おかしなとこに来てもうたなー」

自販機なんて、ないやん。

看板さんに嘘をつかれたのでしょうか。

だとすれば、それは残念なことです。うちは肩を落としてため息を吐きました。うちのこれまでの行動は全て無駄だったのです。

しかし、それだけならまだしも、ここに来て、周囲の霧のせいで方角がすっかり分からなくなっている事に気が付きました。これは、さっきまでの看板の方向も分かりません。

全く、うちは何をやっているのでしょうか。ここからどうやって帰つたらしいのか、その方法がないのです。

きっと今頃シロちゃんはカンカンに怒つているに違いません。疲れたせいもあってか、うちは為す術も無くその場に座り込んでしまいました。

「ごめんな、シロちゃん……」

と誰も聞いていない謝罪をします。

と、その時、

ブルルルルル

。

携帯の着信音が鳴りました。

「あつ」

気づいて立ち上がり、ポケットから取り出します。そこに表示されていたのは、『シロちゃん』の文字でした。

「せや、わざわざ番号登録してたんやつたつけ」

助かつた。

これで、シロちゃんに迎えに来でもらえます。うちはそう思って電話に出ました。

「もしもし、シロちゃん」

「ああ良かつた！ 繋がつた！ 椿ちゃん、大丈夫かい？」

うちは久しぶりに聞く彼の声に安心しました。

「うん、うちは大丈夫や。ピンピンしてん」

「そうか、それなら、いいけど……椿ちゃん、今どこにいるんだ？」

「え、ええとな、うちはふるーじ神社の前」

「じ、神社だつてー？」

電話の向こうでシロちゃんが息を吸つて大きく驚きました。

「何だつてそんなところにジュースを買いに行つたのさ」

「そ、それはな、ちょっと事情があんねん」

さすがに妙な看板に従つ内にたどり着いたなどとは言い難く、うちは言葉を濁しました。

「事情って……と、とにかくや」を動かないで。僕が迎えに行くか

「ひ

「ほんまにっ、せやつたら嬉しこわ。うひ、実は道に迷つてしゅわつ

て……」

「だらりと黙つたわ

かると、シロウチが全て了解済み、とつ感じで間髪入れず、  
そつ聞こました。

「え?」

「椿ちゃんは昔から方向音痴だったしね。僕がよく探しに行つたよ  
ね」

シロウチさんの口調は、まるで昔の記憶を懐かしうつむいて聞こえま  
す。しかし、いつは命懸がこさせんでした。

「シロウチさんが、うひを?」

「あれ、覚えてないの?」

「え、ええと……」

「うちは、記憶を探りながらひもつてしまします。シロウチさんが  
迷子になつたうひを迎えてくれたことなどあつたでしょ? うか。  
分かりません。

しかし、シロウチさんは嘘をつてこるよつては聞こえませそし、  
びつから本當にあつたことには間違いなやつです。

ところが、ひちまさんな大事なことをすっかり忘れてしま  
つたのでしょ? うか。だとすれば、それはとても申し訳ないことです。  
うちはそのことを謝るつとして、ふいに、自分の周囲が明るくなつ  
たことに気が付きました。

「あれ？」

誰かがライトを持ってきたのでしょうか。

「いえ、違います。」

背後を振り返った途端、空を割つて、稻妻が地上を田指して落ちてきました。

「ドドーン！」

凄まじい音が響いて、うちは携帯を思わず取り落としてしまいました。目の前で起こったことが信じられず、尻餅をついてしまいました。

ブスブス、と木の焦げた匂いが周囲に満ち、見上げると、神社の屋根から黒い煙が立ち上っていました。

「じ、神社に、雷が……」

うちは衝撃のあまり、それだけしか口にできませんでした。

しかし、本当に驚くのは、うちのその言葉に返事が返ってきたことでした。

「そうだぜ」

「……え？」

「」おれっちは神社の上に落ちてきたのさ」

振り返ると、焦げた神社の屋根の辺り、その上空を、奇妙な姿の鳥が浮かんでいました。

「おれっちは名前はミカヅチ」

黄金色の光に包まれたその鳥は大きく翼をはためかせて言いました。

「なあ、お嬢ちゃん。あんた、おれっちの巫女になってくれよ」

青山椿が迷子になつたと聞いても、僕は対して驚かなかつた。

いつでも糸の切れた凧のようにふらふらしているあいつなら、いかにも、という感じがしたし、そもそも僕は彼女に對して、さほど興味がなかつたので、だからどうした、と言い返したくなる気持ちの方が強かつた。

しかし、目の前にしゃがみこみ、不安に揺れている教師の目は、僕に助けを求めていた。

「ねえ、小賀玉君。本当にあの子のこと見てないの？」

近くに椿がいないと知つたこの女性教師は、先ほどからこの調子で同じ質問を意味もなく繰り返している。僕は首を振るのにも疲れで、いい加減うんざりした。

僕はその日、学校の遠足で、町から離れた小高い山まで來ていた。季節はいつしか暑い夏を越えて、木の葉が色づく秋である。

全校生徒で美しい紅葉の景色を眺めながらのハイキングだつた。からりとした快晴の下、野原で弁当を食べ、散々走りまわつて遊んだ後、山の中に入り、綺麗な落ち葉やどんぐりを集めて回つた。そして、陽が傾き、いよいよ帰ろうか、という段になり、教師が点呼を取つた時、あの青山椿がいることに気がついたのである。予想外の事態に場は騒然となつたのは言つまでもない。一体、どこに行つたのだろう。迷子になつたのかな。崖から落ちたのかも。そんな恐怖と興奮に満ちた声が飛び交つた。

彼女の友人の中に、直前に林の中で椿を見たという少女がいた。彼女の話では、椿はその友人の少女と共にどんぐり拾いをしてい

たらしいのだが、落ちている数が少ないと思った椿は、もつと奥に行つて拾つてくると進んで行つたきり、姿を見ていないのだと呟つ。

「僕は見てませんよ、先生」

苛立つた口調で答える。

「大体、僕があいつのことなんて知るわけないじゃないですか。どうしてそんなことを何度も聞くんです？」

すると、そこで混乱に満ちていた教師の瞳が、一瞬だけ元通りになつた。

「だつて

と彼女は口を動かす。

「だつて、あなたたち『いつも一緒にいる』じゃない」

その当然だと言いたげな言葉に、僕は認めたくない事実を突きつけられた気分になつた。

ああ、そうだ。その教師の言つとおりである。

この学校に転校してからといつもの、僕の周囲にはなぜかいつもあの青山椿の姿があつたのだ。教室にいる時はもちろんのこと、休憩時間に外で遊ぶ時も、社会見学でも、登下校中でさえ、彼女は僕の背中にくつついていた。

もちろん断つておくが、僕が彼女に對して友好の情を持つて近づいているわけじゃない。彼女の方が勝手に寄つてくるのだ。

「なあなあ、昨日の夜は何食べた？」

「体育の授業はしんどいなあ」

「宿題忘れたー、ノート見させてくれへん?」

などなど、取るに足らない、どうでもいい事で僕に話しかけてくる。

基本的に僕はそんな彼女に対し、無視を貫き通すのだが、彼女はなぜか、僕に会話を試みることをやめることはなかつた。一体何が、彼女にその不屈の根気強さを持たせているのか、疑問である。

ともかく、その結果、誠に遺憾なことではあるが、僕と彼女は二人でセツトという非常にねじ曲がった常識がクラス内で広まつてしまつたのである。

僕はそこで口の奥に広がつた苦味のようなものを奥歯でかみ殺して、教師の方を見る。彼女は未だ、何か言いたげに僕を見つめたままである。

分かつてゐる。

彼女が僕に望んでいることはもう十分に理解していた。今まではそれに従うことが不服であつたために、無視をしていたのだが、このまま教師のプレッシャーを「えられ続けるのも我慢の限界である。

「分かりました、僕が探しに行けばいいんですね

僕が観念したように了解すると、現金なもので、その女性教師は困った表情からじりじりと一変、笑顔を見せた。

「あら、ほんと? すぐ助かるわ、小賀玉君」

そして、立ち上がり、

「じゃあ、先生たちは向こうの方をもう一度探してみるから、あなたは向こうをお願い

と駆け出した。

「期待しないでくださいよ」

「僕には別に、青山椿レーダーなんてものは内蔵されてないんですね

から」

すると、その教師は走りだした途中で振り返り、こいつ言った。

「そうよね、確かにそんなんだけれど。なんだか、あなたなら彼女を見つけられそうな気がしちゃうのよね」

「なんですか、それ」

「うーん、何なのかしらね。あなたと椿ちゃんってどうしてか、二人一緒にいてしつくづくるっていうか、互いに引き合ってるっていうか不思議な感じがするのよ。だから、もしかしたら、って思っちゃうの」

思つちゃうの、って。

僕はその教師の言い方が気に入らなかつた。そういう根拠の伴わない曖昧な言い方をするのは頭の悪い人間のことだと思つていたからだ。

聞くに耐えない、戯れ言だ。

そう、思つていた。

しかし、これまた遺憾なことに、彼女の予感は的中するに違ひない。

この後、僕は林の中に入つてものの数分で、繁みの中から飛び出してきた彼女に会うのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8545w/>

---

運命なんて怖くない！

2011年11月27日18時46分発行